正しい批判はいかにあるべきか（十）

——教条主義批判を装った修正主義——

山本二三丸

まえがき
第一節　予備的注意
第二節　榊氏による拙著『構造改革論批判』の批判（その一）……（以上、本誌第二十一巻第一号所載）
第三節　榊氏による拙著『構造改革論批判』の批判（その二）……（以上、本誌第二十一巻第二号所載）
第四節　榊氏による拙著『構造改革論批判』の批判（その三）……（以上、本誌第二十一巻第三号所載）
第五節　榊氏による拙著『構造改革論批判』の批判（その四）……（以上、本誌第二十一巻第四号所載）
第六節　榊氏による修正主義批判（その一）……（以上、本誌第二十二巻第一号所載）
第七節　榊氏による修正主義批判（その二）……（以上、本誌第二十二巻第三号所載）
第八節　榊氏による修正主義批判（その三）……（以上、本誌第二十二巻第四号所載）
第九節　榊氏による修正主義批判（その四）……（以上、本誌第二十三巻第一号所載）
第十節　榊氏による修正主義批判（その五）……（以上、本誌第二十三巻第二号所載）
第十一節　榊氏の「教条主義批判」の客観的意義（その一）……（以上、本号所載）
第十二節　榊氏の「教条主義批判」の客観的意義（その二）
むすび

正しい批判はいかにあるべきか

第十一節　榊氏の「教条主義批判」の客観的意義（その一）

一

さて、これまで本論稿の第六節から第十節にいたるまで、現代修正主義の主流＝フルシチョフ主義にたいして「わが国のマルクス・レーニン主義者」と自称する「日共指導層」がどのような「批判」を加えてきたか、とくにその一員、「哲学者兼評論家」をもって自任する榊利夫氏が、その「専門的立場」からどのような「批判」をおこなってきたかということを、ひたすら事実に則して検討してきたが、このようなあくまでも事実に則した科学的批判によって、いまや、つぎのような客観的真実が明瞭に浮びあがってきたということができよう。それは、第一に、榊氏をふくめて「日共指導層」は、一貫してフルシチョフ修正主義の根本的誤謬、その裏切り的本質を明白にしようという試みはまったくしていないということ、第二には、かれらのフルシチョフ修正主義批判は、まったく「批判をしています」というお体裁をつくるためだけのものだということ、したがって、第三には、かれらがとりあげる批判点は、どれをとってみても枝葉末節の些細なものばかりで、しかもそうした瑣末な論点をとりあげて論ずるさいには、かれら自身フルシチョフと同じ立場にたっていることをおのずからさらけだすことになり、その「批判」は、客観的にはフルシチョフ修正主義の弁護もしくは容認ということになってしまっている、ということである。

どんなにフルシチョフ修正主義を徹底的に「批判」してその誤謬を明らかにし自分自身は真正のマルクス・レーニン主義の立場にたっているものだということを力説強調しようとしても――また、そういう「ためにする批判」をくりかえしやればやるほど――かえって、かれら自身、どんなにマルクス・レーニン主義の立場から救いようもなく逸

脱しているばかりでなく、当のフルシチョフ修正主義理論をうのみにくりかえすだけで精いっぱいだ、ということがますます明るみに出てこざるをえない。すでにこれまで見てきた数々の歴史的事実によってもそれは明白に示されているが、しかし、それ以後つぎつぎに継起する諸事件によってみても、そのたびごとに「日共指導層」の修正主義的本質、フルシチョフ修正主義への完全盲従は、いよいよあらわに示されることになっている。いや、むしろこう言った方が当っていよう、――つまり、それ以後あらたに発生するどんな事件でも、ひとつとして、フルシチョフ主義盲従を本領とする修正主義的「指導層」がこれにたいしてどういう反応を示すものかということを実証する材料としてりっぱに役立たないものはない、かれら修正主義集団の修正主義的本質をそのあらゆる側面において全面的に明るみに出してくれるために、まさにそのためにこそこれらの諸事件はつぎつぎに登場してきたものだ、と。

このように、「日共指導層」がどんなにフルシチョフ修正主義と「たたかい」、これから完全に訣別したと思っても、またどんなにわめきたて、ペテンを弄し、けんめいにあがいてみても、ふたをあけてみるとまたぞろフルシチョフ修正主義の太い綱がその腰にしっかりまつわりついているという事実があらわになるというのは、いったい、どうしたことであろうか？　おそらくは、かれら自身の主観的願望にも反するような、こうした奇妙な結果におわらざるをえないのは、なぜであるか？　これにたいする答えは、同時に、これまで長々とおこなってきた「日共指導層」による「修正主義批判」のあり方を、そのかくされた最奥の秘密を、ときあかすことにもなるであろう。それは、現在の「日共指導層」の根本的性格を、そのあらゆる活動を根本的に規定しているいわば基本的体質を示すものともなるであろう。わたしは、それにたいするひとつの答えは、実に、日本共産党第七回中央委員会総会の「決議」の中に見いだすことができると考える。この七中総は、一九五六年六月二十八日から三十日までひらかれたもので、その

「決議」は、直接にソ連共産党第二〇回大会での『フルシチョフ報告』に全面的に依拠して「革命的路線から修正主義路線への一八〇度転換」＝「回帰転落」を公然決定したものであり、日共第八回党大会で採択された「日共綱領」の基礎をいちはやく設定しおえたものである。そこで、つぎに、「日共指導層」が第二〇回大会の『フルシチョフ報告』をどんなに狂喜してむかえその絶大な画期的意義をこの上もなく高く評価しているかということをその公式声明によってあとづけ、ついで、かれらがこの絶讃と全面的傾倒とにもとづいて、どのように七中総での「決議」を首尾よくうちだすにいたったかということを、事実に則してあとづけておくことにしよう。

二

一九五六年三月二十四日付「アカハタ」には、「日本共産党中央委員会」の署名をもって、『ソ同盟共産党第二十回大会について』という、公式見解が大々的に発表されている。ここには、現代修正主義の主流＝フルシチョフ主義の「体系化」である『第二〇回大会報告』にたいする「日共指導層」の基本的姿勢があますところなく、完全に――それもかれら自身の「最高機関」の公式主張として――うちだされている。そのなかから、「日共指導層」自身の「一八〇度転換」＝「議会主義への回帰転落」のために直接布石をおいたと考えられる個所を、つぎに摘記してかかげてみよう。

「一　世界の共産党・労働者党、労働者階級と勤労大衆、平和と進歩の立場をとる多くの人びとが注目していたソヴエト同盟共産党第二十回大会の成果は、世界史的な意義をもっている。

ソ同盟共産党中央委員会の報告と決議は、世界の新しい情勢と事件の正しい分析にたって、ソヴエト国民の当面の任務をさし示し世界の進歩的な人びとの向うべき道をあきらかにした。

大会は共産主義社会の建設とソ同盟共産党のレーニン主義的発展の道を全面的にあきらかにした。同時に、資本主義と社会主義の両体制の平和的共存の国際的発展、戦争防止の可能性、社会主義への移行の多様な形態、社会民主主義諸党への態度などの原則的な諸問題を、マルクス・レーニン主義の創造的精神をもって発展させた。

二 大会は、生産はいくらかふえたが、それにもかかわらず、資本主義世界が全般的危機と矛盾をふかめているいろいろな要因を分析した。社会主義の世界は、九億の人民の住む十三ヵ国で発展しつつある。社会主義は、今日、世界的体制に転化した。世界情勢のなかに、社会主義の地位がつよくなったことをあらわす基本的な変化がおこった。このことは人類史の新しい時代のおとずれである。

平和勢力は、今日では社会主義勢力だけではない。ヨーロッパ、アジアの平和愛好諸国の出現によって力をました。人類の過半数である十五億の人びとが住む広大な『平和地域』が生れた。過去十年間に、十二億の人民が植民地、半植民地の従属状態から解放された。われわれの眼の前で、帝国主義の植民地体制の解体の過程が進行しつつある。これらの動向の世界史的意義と展望を大会はあきらかにした。

帝国主義が存在するかぎり、戦争の経済的基礎は存在し、独占資本の反動勢力は戦争をくわだてるだろう。しかし、今日の世界には、それを阻止できる物質的、精神的手段をもった強大な社会的政治的勢力が存在している。戦争に反対するすべての勢力が警戒心をもち、戦線を統一し、平和の維持につとめるならば、戦争は不可避でないことを大会はあきらかにした。

社会主義が世界的な体制になった事実から、社会主義への移行の形態がますます多様なものになった。資本主義から社会主義への移行の過程についても有利な条件がうまれている。**一連の資本主義諸国およびかつての植民地国で、一定の条件のもとでは、議会的手段をもちいて、社会主義へ移行する可能性がつくられつつある。**

大会は、これらの重要な問題について、マルクス・レーニン主義の創造的発展に重要な貢けんをした。それは社会主義と平和と独立のための人類の偉大な闘争にとって非常に重要な実践的な意義をもつものであり、それらの闘争の輝かしい展望をてらしだしたものである。

また、大会はこれらの偉大な闘争の勝利を早めるために、統一戦線の課題に重要な関心をむけた。戦争に反対するすべての人びととの共同、および『労働者階級運動における分裂状態を克服し、共産党と社会党、その他平和を愛し、帝国主義の圧迫とたたかい、自国民の民族的利益と民主主義と独立をまもろうとする諸政党と実務的な接触を確立することがきわめて重要である』と大会

が指摘したのは時宜に適したものであった。

三　ソ同盟は、この二十五年間に二十倍も生産力を発展させ、五ヵ年計画を期限前に遂行した。これはソ同盟共産党とソヴエト国民の大きな勝利であった。……

大会で確認されているように、ソ同盟の対外政策は、平和共存というレーニン的原則を基礎として国際緊張をゆるめ『平和五原則』にそってすべての国民との関係を改善し、信頼と協力を発展さす方針につらぬかれている。

大会の決議は、『相互信頼を強化し、経済的なむすびつきをひろげ、文化と科学の面の接触と協力を拡大する見とおしをもって』わが日本をふくむ**アメリカ**・イギリス・フランスなどの諸国との関係の改善をのぞんでいる。

そして、『軍縮、原子・水爆兵器の禁止、ヨーロッパ、アジアの安全保障体制の確立』をめざすとともに、軍縮の重要問題について協定に達するまでのあいだ、部分的な措置として、熱核兵器の実験の中止をも提案している。

四　大会の報告と決議は、これらの社会主義発展の問題を党生活のマルクス・レーニン主義的前進と強化の課題と深く結合している。大会はマルクス・レーニン主義の光にてらして、党の上に個人をおく個人崇拝の残りかすを一掃する、はっきりした態度をとり、党と大衆の役割、党内集団指導の役割をあきらかにした。

……

五　大会の成果は、ソ同盟共産党とその中央委員会が大きな勇気と卒直さをもって、マルクス・レーニン主義の道をますます勝利のうちに前進していることを知らせている。ソ同盟共産党が内外政策と党生活においてたたかいとったすばらしい成果はソ同盟共産党にたいするわれわれの信頼を一そうたかめるものである。

わが党員はみな、ソ同盟共産党第二十回大会の巨大な世界史的意義から深くまなばなければならない。ソ同盟共産党中央委員会の報告と、それにもとづく大会決議はもちろん、監査委員会の報告、大会資格審査委員会の報告、および『恒久平和のために、人民民主主義のために！』紙上で系統的に紹介されている諸同志の演説、その他、**大会の全内容をできるだけくわしく研究し、学習する必要がある。**

大きく豊富なこれらの諸成果を学ぶことは、わが党の戦列を理論的、実践的につよめるのに大きな力となる。

六　……

このような任務に立っているわが日本の共産主義者にとって、ソ同盟共産党第二十回大会の諸結果は、数多くの教訓に富んでい

る。

わが党は、これらの当面の闘争のなかで、大会の豊富な諸成果を理論的、実践的に一そう深くまなび、わが党の政策と理論をマルクス・レーニン主義の不敗の旗のもとに一そう発展させよう。……

わが党がかたく大衆と結びつき、大衆の先頭にたって、困難にひるまず、勇気をもって献身的にたたかい、そのなかで党のレーニン主義的建設と発展をはかるならば、米日反動の陰謀を粉砕するために、わが党はすべての健全な進歩的な愛国勢力との団結を促進することができるであろう。平和・独立・民主日本の建設の道をきりひらくことができるであろう。

ソ同盟共産党第二十回大会の全成果は、マルクス・レーニン主義にみちびかれた社会発展のための闘争、平和と独立・民主主義・社会主義の大業が、全世界史的な規模で必ず最終的に勝利することをあきらかにしている」（傍点およびゴシック体—山本）。

ごらんのように、第二〇回大会『フルシチョフ報告』は、マルクス・レーニン主義の創造的発展として全面的に絶讃・推賞されていて、後年榊氏があちらこちらとケチをつけまわしたときのような文句は、どこを探しても見あたらない。「平和共存、平和競争、平和移行」からはじまって「戦争と平和の問題」、「部分的軍縮措置」や「個人崇拝非難」等々にいたるまで、ひとつのこらず完全にレーニン的原則にそったもの、これを創造的に発展させたもの、すべてこれ、真剣に研究・学習すべきものばかりである。この公式主張をよく読んで頭の中にいれておけば、宮本、袴田、榊の諸氏面々が、ソ連共産党第二二回大会の報告と「新綱領」をけんめいにかつぎまわり、「中ソ論争」に当面しては全く見当ちがいの「おためごかし」的おしゃべりで時間をかせぎ、教祖・総本山からの叱責にたいしては綿綿たる「弁明書」を綴り、「フルシチョフ修正主義」にたいしては「批判・闘争」しているという体裁をつくるべく枝葉末節のあらさがしを並べたてる、等々といった顚末が、その底の底まですっかりよく理解されるのである。

三

右の公式主張に明示されてあるように、「日共指導層」は、この画期的『フルシチョフ報告』からただちに、この『報告』の精神に忠実にのっとって、「真剣に学びとり、戦列を理論的・実践的につよめる」べく、けんめいに奮闘をかさねることになる。その「奮闘」の「成果」として輝やかしくも成文化されたものが、まさに画期的な「七中総決議」というわけである。

われわれは、一九五六年七月二日付「アカハタ」紙上に堂々と発表されたこの「七中総決議」について、それが、フルシチョフ教祖のもっとも忠実な弟子＝「日共指導層」のそれ以後のあり方、その活動のいっさいを完全に決定するという、まさに文字通りの画期的意義をもつものだということを、その内容についてしかと確認しておく必要がある。この「決議」は『独立、民主主義のための解放闘争途上の若干の問題について』という、意識的にさりげない表題を与えられているが、どうして、その中味たるや、「若干の問題」どころではないのである。

「一、小選挙区制反対闘争を通じて、すべての民主勢力のあいだに、国会を国民（?!）の民主主義的総意（?!）を反映しうるものとして確保しなければならない（?!）という決意はかつてないほどたかまった。

ここ数年間の選挙を通じて、平和、独立、民主主義を守ろうとする勢力は、しだいに国会に進出している。……

沖縄人民のプライス勧告に反対する全島的な闘いは、アメリカ帝国主義の従属下におかれているわが日本民族の独立闘争の不可分の一翼であり、わが民族の解放闘争全体をさらにつよくはげましている。

これらの闘争を通じて、現在の情勢下における民族解放民主革命および社会主義のための闘争の過程と方法についての関心と討議が、わが党だけでなく、多くの人びとのあいだに起っているのは当然（?!）である。

ソヴエト同盟共産党第二十回大会が、社会主義への移行の多様な形態、および一連の資本主義国での革命の平和的発展の可能性の問題を提起していらい、わが国においても、この問題を、実践的にも理論的にもあきらかにすることが求められてきた。そして今日闘われている参議院選挙戦においても、わが党への国民諸君の質問は、すくなからずこの問題の明白な解答を求めている。

二、第七回中央委員会総会は、この問題に関するこれまでの討議によって到達した結論を、ここに表明することを必要とみとめた。

日本帝国主義の敗退にいたるまでの天皇制支配の下ではわが国には議会を通じる革命（!!）の可能性はまったくとざされていた。革命政党と階級的労働組合の自由は奪われ、軍事的・警察的天皇制の独裁の『いちじくの葉』にすぎなかった当時の『議会』を通じての『社会主義』の主張は、改良主義者の持論であったが、それは空想としてみじめな破産に終るほかはないものであった。

戦後においても、アメリカ帝国主義の軍政の下では、わが国の国会は国民の総意を反映しうるもの（?!）となっていなかった。

……

一九五二年四月のサンフランシスコ二条約は、明らかにアメリカ帝国主義のわが国への支配をあたらしい情勢に応じて『効果的』に継続するために、日本の売国反動勢力とのあいだに結ばれたものであるが、その支配の形式と内容は相当の変化をもたらした。現在は、サンフランシスコ条約、安全保障条約、行政協定などの売国的諸条約によるわが国土の占領、アメリカ帝国主義にたいする日本の政治上、軍事上の従属および経済上、金融上の事実上の従属が中心である。アメリカ帝国主義のこのような支配に、日本の反動勢力は『目したの同盟者』として結合して、国会において多数をしめ（!!）、内閣を構成し、行政機構をにぎり、支配層の搾取と特権の強化と保持にあたっている。

サンフランシスコ条約、安保条約などの不平等条約のもとにおいて**さえ**（?!）、なお要求しうる当然の権利（?!）を、日本のこれまでの保守政府は要求していない。国民の総意を真に代表し、国民の権利を守る意志があれば、当然これらの条約の改訂、廃棄を要求する権利（?!）は日本政府にある。

これまでの保守政府は、一面（?!）アメリカに要求され、他面（?!）みずからすすんで従属してきたのである。……それゆえに、日本の独立と解放の問題は、**まず**（?!）これらの反民族的反動のにぎる政府のかわりに、国民の総意を真に代表する（!!）独立と民主主義、平和の勢力を結集して、**国会に基礎をおく**（!!）**民主主義的民族的政府の樹立が最後には**（?!）**必要である。**

今日の情勢のもとでは、わが国民の解放闘争にとって、憲法に規定されている民主的諸権利の擁護がきわめて重要なものとなっている。現行憲法は天皇制の残存、その他、民主憲法（!!）としては不徹底な面を残してはいるが、それにもかかわらず、わが国

民は、憲法の規定した民主的権利を武器として民主的な闘争（?!）を前進させてきた。民主的諸党派および各分野の大衆運動は、なお種々の欠陥をもちながらも（?!）戦前の状態にくらべれば画期的に成長して、国会内の勢力にも（!!）反映している。

……独立と民主主義、平和の勢力はなお十分統一されているとはいえないが、それでも、それぞれの民主的政党や民主的諸団体は大衆運動と国会内の勢力の前進のために多くのたたかいをつづけている。

このような闘い（?!）をねばりづよくつづけ、民主的党派（!!）が国会で多数をしめることが可能であろうか、**われわれは可能であると考える**（!!）。

第一、そのためには言論、集会、結社の自由が守られるという条件のもとで、国会が国民の総意（!!）を全体として民主的に反映しうる（!!）ような民主的な選挙法をもち、国会が民主的に運営される（!!）ことが必要である。……

第二、独立と民主主義、平和のために闘う諸政党――まず第一に、科学的社会主義によって指導される（?!）、もっとも徹底的に闘いうる労働者階級の前衛党が強大になり、よく組織される（!!）こと、それが労働者階級と国民のなかに決定的な影響力（?!）をうちたてることが必要である。

そして、独立と民主主義のために闘う諸党派が、それぞれの思想的立場をのりこえて（?!）、行動を統一することが必要である。それによって、国民の多数を代表する政治勢力が、国会内でも（?!）国会外でも、反動勢力にたいして数的な（?!）組織的な（?!）優位を保障できるからである。

第三、民主主義的な権利と生活をまもる国会外の大衆運動の強化、それにもとづく労働者階級をはじめとするすべての民主勢力の統一の強化、すなわち民族解放民主統一戦線の結成と発展が必要である。

このようにして（?!）、独立と民主主義の勢力が国会で多数をしめうるならば、それにもとづいて**適法的に**（!!）国民の総意をも（!!）執行する政府を構成することが可能である。

そして以上のような国内の条件を確立することができれば、現在の国際情勢の発展方向（?!）のもとにおいては、このような政府が内戦をともなうことなしに（!!）『平和的』に成立しうる可能性がある。**すなわち**、今日は、ソ同盟共産党第二十回大会の分析が示した通り（!!）、国際的には、社会主義が世界的な体制となり、人類の三分の二、十五億の人びとが平和共存をもとめる平和地域の国（?!）にすみ、植民地体制の崩壊がつづき、アジア、アフリカをはじめ、世界の各地で植民地や従属国の独立闘争が大きく成長しつつある時代である。また、これらの国際情勢の結果、平和勢力は、帝国主義の勢力がたくらむ侵略と戦争準備の政策にも

かかわらず、戦争を防止し、恒久的な平和をかちとる現実的な（?!）可能性（?!）が生れている。具体的には、一般軍縮と熱核兵器の禁止、集団安全保障体制の確立が必要であり、可能である。

……

世界における社会主義および平和と独立の勢力にとって、深く有利なこのような情勢にもとづいて、社会主義と民族解放、民主主義のための革命に多様な形態の可能性が生じている（!!）とともに、その方法についても、あたらしく有利な展望がひらかれた。一連の国々では、**内戦をともなわずに、すなわち議会を通じて、平和的に革命を行うことが可能となった**（!!）。

わが日本国民も、世界の社会主義、平和勢力とともに、このような国際情勢の前進のために力をつくしながら（?!）、わが日本において独立、平和、民主主義のための政府を、**内戦をともなわず勝利的にうちたてる可能性をつくることができる**（!!）。

このような政府は、その国民（!!）との結合、国民（!!）からの支持および政府を構成する民主党派（?!）の指導性（?!）や統一行動の確固さ（?!）に応じて（?!）――内外の力関係に応じた（?!）進歩的・革命的な政策を実行できる。……国際情勢の展望も（?!）、平和的にこのような解放の道をかちとることを可能としている。

そして、このような情勢を実現しうるならば（?!）、**社会主義への移行もまた平和的に可能である**（!!）。

……

マルクス・レーニン主義は、社会発展の過程をできるだけすみやかに、よりすくない犠牲のもとにすすめようとするものである。レーニンも（!!）『労働者階級は、もちろん平和的に権力をその手ににぎるほうを選ぶであろう』（レーニン全集、邦訳二九五ページ『ロシア社会民主主義派のうちの後退的傾向』）と強調していた。過去において、たとえばロシア革命において、革命の平和的発展の可能な段階にはそれがよびかけられ、努力されたが、その道のとざされた段階では、ツァーリの専制支配と武力弾圧（?!）、外国帝国主義の干渉戦のもとで（!!）、それをとる余地がなかった（!!）からである。

したがって（?!）、今日、一連の国々で達成された社会主義への平和的移行（?!）および一連の資本主義国での新しい可能性（?!）は、世界情勢の大きな変化、科学的な社会主義――マルクス・レーニン主義の非革命的な改良主義理論にたいする勝利（?!）と社会主義体制の世界的前進とによってひらかれたのである（!!）。

今日から（!!）、われわれは情勢と力関係のあらゆる（?!）発展の可能性を考慮しつつも（?!）、しかもできるだけ平和的な方法によって革命の勝利が達成されるように（!!）、平和・独立・民主勢力の強化のために、不断に努力しなければならない。……

……

三、以上のことからみて、一九五一年に採択されたわが党のいわゆる新綱領『日本共産党の当面の要求』のなかに示されている『日本の解放と民主的変革を、平和の手段によって達成しうると考えるのはまちがいである』という部分は、現在の国際的国内的情勢とその将来の発展、日本国民の解放闘争の過程とその諸条件を考慮する場合、あきらかに今日の事態に適合しないものになっている。

したがって、われわれは、サンフランシスコ条約成立以前の情勢のもとにおいて作成されたこの綱領の不適切な他の若干の部分とともに、この問題について改訂することを必要とみとめる。

わが中央委員会は、次期大会に綱領の改訂を提案するために準備し、この問題についての全党の討議を積極的に（?!）組織することを必要とみとめる」（傍点、ゴシック体および（!!）、（?!）—山本）。

四

読者諸君は、この「七中総決議」の意味するところをとくと玩味されたい。これほど、「日共指導層」の修正主義的本質を、そのフルシチョフへの完全無欠な盲従ぶりを、動かしがたく実証しているものが、またとあるであろうか？　「日共指導層」は、とっくの昔から革命的基本的原則は事実上放棄していたのであるが、いまや、第二〇回大会での『フルシチョフ報告』を教祖から授けられることによって、その本来の「品性」にぴったりの路線、つまり「議会的・平和的方法」という完全無欠な修正主義路線におおっぴらに転換する「りっぱな理由」にありつくことになった。「マルクス・レーニン主義の創造的発展」という極（キワ）めづきの『フルシチョフ報告』が「平和革命の途」を指し示してくれているではないか。このときに、「フルシチョフ路線」をいっそうおしすすめ、「革命的方法」はいっさい切りすてて、ただひとつ「議会的方法」のみを唯一の路線として打ちだし宣伝することによって、名実ともに教

祖の最高・忠実な弟子としての「日共指導層」の不動の地位を確保しないで、どうしていられようか？　いまこそ、本領を発揮して、本来の体質にぴったり適合した「平和的路線」を「綱領」として堂々うちだすべき決定的時期、絶好のチャンスではないか？

このようにして「準備・作成」され、第八回党大会で「満場一致」採択されたのが、かの有名な「日共綱領」である。これは、フルシチョフ教祖に傾倒・盲従している高弟が、教祖の「教え」をそのままとって自身の「守り本尊」として仕立てあげたものである。これこそは、「日共指導層」の根本的性格、つまりフルシチョフ主義盲従と比類ない俗物的修正主義的本質との、この上もない美事な記念碑にほかならない。

右のような不動の記念碑、あるいは旗印をば「綱領」としてかつぎ、あがめ、宣伝してまわっているかぎり、たとえどんなに「修正主義批判」を並べたてようとも、「日共指導層」自身の修正主義的本質はいささかも動ずるものではなく、むしろ事あるごとにそのフルシチョフ主義への完全盲従と俗物的修正主義者としての実体をさらけだすことにならざるをえないのは、まことに理の当然である。われわれがこれまで詳細にあとづけてきたように、『第二十二回大会報告』への献身的絶讃と支持、中ソ両党指導部間の重大な論争にたいする薄っぺらなでまかせ的逃げ口上、あるいはフルシチョフ修正主義にたいするまやかし的「批判」等々は、右の「七中総決議」とこれにもとづいて打ちだされた「日共綱領」をその「本質規定」としている「日共指導層」の真実のあり方を考えれば、みないずれも「必然的」なものばかりであったといわなければならない。

ところで、フルシチョフ主義へのまやかし的「批判」をくりかえしているときには、早晩、自分自身の旗印、つまり「日共綱領」のフルシチョフ主義盲従＝超修正主義ぶりは、おのずと明るみに出ざるをえない。そこで、「日共指

導部」というえがたい地位を確実にその手中ににぎっているためにもっとも「確実な」方法が考えだされなければならない。その手はただひとつ、フルシチョフ路線を「免罪」し、これによって「日共綱領」をも「免罪」し、同時に「日共指導層」が「戦闘的・革命的路線」を守り「発展させる」ことに奮闘しているという印象を不動のものにするような「国際的なたたかい」を提唱し、結成することである。おそらく、「日共指導層」が「ベトナム援助統一戦線」なるものを考えだし、これを中国共産党に提案するようになったのは、右のような事情によるものと思われる。ところが、この唯一・絶好と思われた「提案」を実行に移す段になって、残念ながら、さいころは完全に「裏目」と出てしまったのである。われわれは、さきの「七中総決議」の内容について、簡単な注(1)記を加えておいて、つぎに、右の「提案」の首尾についてみてみることにしよう。

(1)　「社会主義への平和的移行」という言葉は、フルシチョフ教祖の場合にもそうであったが、わが「日共指導層」も、これを意識的に「あいまいな」形で用いている。レーニンが「平和的移行」を問題にしたのは、すべて、武装権力＝労農兵ソヴェトが強力によってツアーリズムを打倒したあと、臨時革命政府の権力との間に「二重権力」状態をつくりだしていたときのことである。すでに強力によって、権力を実質的に—だが「部分的に」—握っている武装ソヴェトの手に平和に全権力が移るか否かの問題と、軍隊・警察を完全にそなえた全一的なブルジョア国家権力にたいして、これをどのように打ち倒して全くあらたに革命権力をうちたてるかという問題とは、全く事柄がちがうのである。レーニンの「平和的移行」は前者の場合についてだけである。このレーニンの「平和的移行」という言葉を後者にあてはめて通用させようという悪どい手口を弄しているのが『フルシチョフ報告』であり、「七中総決議」、『四・二九論文』等々である。

ところで、「日共指導層」は、例によって、右の「七中総決議」の中に、レーニンからの引用文をかかげて、フルシチョフ主義への盲従＝「一八〇度転換」という「やり口」を正当化しようとはかっているが、この引用は、毎度のことながら、完全に誤っているばかりでなく、レーニンの真意をその正反対のものに歪めているものなのである。「七中総決議」は、まず、「マルクス・レーニン主義は、社会発展の過程をできるだけすみやかに、よりすくない犠牲のもとにすすめようとするものであ

る」とまことしやかに述べたてているが、これはきわめて卑劣な曲論である。マルクス・レーニン主義は「できるだけすみやかに、よりすくない犠牲のもとに」を第一に考えるものでは、けっしてない。それが第一に、そして決定的なこととして考えるのは、「社会発展の過程をできるだけ確実に、絶対に反革命の反抗をおしつぶすという方針のもとに、そのために必要な犠牲はどんなに払ってもやりとげる」ということである。レーニン全集からの引用は、題目とページ数のみが記されていて、巻数は示されていない。重大な論拠として挙げられたレーニンの文章の出所を明記しないとは、あきれたものである。だが、見方によっては、巻数を明記しないほうが得策であるので、わざと明記しなかったとも思われる。というのは、もし、善意の読者が「不心得にも」レーニン全集の原典について確認しておこうと考えるとすれば、そして、事実原ページについてその全体的意味を正しく読みとるならば、レーニンが言おうとしているのは、「日共指導層」の意図していることとは正反対のことであるという事実がすぐさま明らかになるからである。レーニンの論文『ロシア社会民主主義派のうちの後退的傾向』は一八九九年末に書かれ、全集第四版第四巻に収められているが、その表題の示しているように、専制にたいする合法的平和的闘争を批判して、革命的強力的闘争を主張しているものである。つぎに、関連個所を引用してかかげてみよう。

「……こうして『ラボーチャヤ・ムイスリ』の編集者たちは、革命的な方法を排除し、平和的方法によって達成されるものだけを労働者社会主義とみなしている。社会主義をこのようにせばめ、それを月並みなブルジョア自由主義に帰着させることは、これまた、すべてのロシア社会民主主義者と、きわめて多くの、圧倒的多数のヨーロッパ社会民主主義者との見解にたいして、非常な一歩後退である。もちろん、労働者階級は平和的に権力を奪取するほうをえらぶであろうが、プロレタリアートがわから**権力の革命的奪取**を断念するということは、理論的な見地からも、実践的＝政治的な見地からも、無思慮であり、ブルジョアジーとすべての有産階級とにたいする**恥ずべき譲歩**を意味するにすぎないであろう。**ブルジョアジーが、プロレタリアートにたいして平和的に譲歩せずに、決定的な瞬間に強力をもって自分の特権をまもる挙に出るということは、大いにありそうなことであり、それどころか、もっともありそうなことでさえある。**このばあい労働者階級にとって、革命以外には、自分の目的を実現する他の道は残されないであろう。**だからこそ**『労働者社会主義』の綱領は、一般に政治権力の獲得のことを述べて、その獲得の方法を規定しないのである。というのは、この方法の選択は、われわれが正確に規定することのできない未来にかかっているからである。だが、プロレタリアートの行動をぜひともただ一つ平和的な『民主主義化』にかぎるということは、くりかえしていうが、労働者社会主義の概念をまったく勝手気ままにせばめ、**卑俗化**することを意味する」（第四

巻、二五三―二五四ページ、傍点―レーニン、ゴシック体―山本）。

みられるように、レーニンの説明は、「七中総決議」の意図するところと正反対のことをあきらかにしており、「七中総決議」の主張が完全に誤りであることを明らかに示している。権力の掌握が絶対に確実であり、反革命の抵抗がとるにたらないならば、もちろん労働者階級は「平和的獲得」のほうをえらぶのが、当然である。だが、レーニンは、「平和的掌握」はきわめて稀であり、「もっともありそうなこと」は、支配階級が強力をもって反抗して「平和的掌握」は不可能となることだ、と教示している。このようなレーニンの説明の中から、「労働者階級は平和的に権力を掌握するほうをえらぶであろう」という文句だけ引いてきて、レーニンが「平和革命」をつよく支持しているという全くの虚構をでっちあげようとするとは、なんという恥しらずな「日共指導層」であろうか！　この連中は、右の中から、「労働者社会主義」の綱領は「一般に政治権力の獲得のことを述べて、その獲得の方法を規定しない」という文章を馬鹿の一つ覚え式にくりかえし引用して、「だから、レーニンは、強力革命だけを主張しているのではない、状況によっては平和革命も可能だと主張しているのだ」というように説明してまわっているが、これもまたきわめて悪質なペテンというほかない。本文を読めばすぐわかるように、レーニンは、むしろ反対のことを、つまり、革命はけっして平和的におこなわれるとはかぎらず、むしろ「もっともありそうなこと」は強力革命のほうであるということを主張しているのである。こうしたレーニンの文章をば、その真意をゆがめて引用し、しかもレーニンが論駁している当の謬論を正当化する「論拠」にすりかえてしまおうとはかるとは、また、なんと見下げはてた教祖盲従分子＝「平和革命」亡者どもであろうか！

五

一九六六年二月二十八日北京入りした日共代表団は、三月三日から中共代表団と「会談」し、「ベトナム援助統一戦線」の結成について討議を重ねた模様であるが、ついに完全な合意に達せず、共同コミュニケは成立をみず、日共代表団は空しく帰国せざるをえなかった。この「三月会談」の内容は、両党とも公表しない建前なので、その経緯ははっきりつかめないはずだが、ふしぎにも、日本では、この「会談決裂」について、「それは毛主席が日共にただち

に武装革命闘争にたちあがるべきだと強要したためで、日共はその不当な要求をけったのだ」などという風評が、週刊誌などに公表されたりした。こうした根も葉もないデマ・ニュースがどこから流されたかは、このデマ流布によって誰がどのような利益を受けるかということを考えれば、簡単にわかる。「ベトナム援助統一戦線」の結成を提唱して自身の「国際的地位」の「強化」をはかったのは、フルシチョフ教祖の高弟＝「日共指導層」以外にはありえない。この「会談」の内容そのものについての公式発表はないが、しかし、その概要をとらえるに十分な材料は、幸いにも、責任ある両党関係者の公表したものがひとつづつある。中共側のものとしては、一九六六年十二月七日、訪中第四次学習活動家代表団にたいして当時の中共代表団の一人、趙安博氏のおこなった「談話」であり、日共側のものとしては、一九六七年一月二十四日付「赤旗」の論説、『紅衛兵の不当な非難に答える』である。われわれは「会談」の内容をうかがい知る便宜を考えて、まず、「赤旗」論説からみていくことにしよう。

論説『紅衛兵の不当な非難に答える』は、三つの節から成り立っており、その(一)は、「三月会談」の内容は両党とも公表しない建前をとってきたのに「紅衛兵の壁新聞」がこの「会談」に直接ふれて日共代表団に「不当な攻撃」を加えてきたので、日共としても、「事実と真相」をあきらかにしてこれに「こたえる権利を行使せざるをえないのは当然」だということを述べたもの、その(二)は、この「事実と真相」の説明である。そしてその(三)では、日共はりっぱにフルシチョフ修正主義とたたかっていることを力説し、ソ連共産党指導部を加えて「ベトナム援助統一戦線」を結成すべきであるにもかかわらず、ソ連共産党指導部を名ざしで非難することを主張する中共指導部には同調できないし、またそのために日共を「修正主義の党」といって非難するようなやり方はまったくもって不当だ、ということが主張されているのである。この「赤旗」論説の客観的な意義と性格をただしくとらえるために、まず、右

の論説のあらましをつぎに引用してかかげることにしよう（①、②、……はあとで吟味を加えるさいの便宜をかんがえて、山本のつけたもの）。

「

（一）

①一月二十二日、北京に駐在している『赤旗』紺野特派員から送られてきた通信および日本の報道機関―新聞、テレビ、ラジオなどの報道によると、北京市内に『人民大学紅衛兵』の名で『鄧小平の反動的言行録』と題する長文の壁新聞がはりだされた。そのなかで、昨年の日中両党会談をめぐって、わが党を『修正主義』とののしった名ざしの公然たる非難がおこなわれている。この壁新聞のわが党にかんする部分の全文はつぎのとおりである。

『一九六六年日本共産党代表が中国にきた。劉少奇、鄧小平がおもに出て会談し、一つの声明草案をつくった。調子はきわめて低いもので一点もソ連修正主義の文字が出ていない。毛主席はこれにたいして鋭い批判を出してみずからきわめて重要な修正をおこなった。その結果、**修正主義の日本共産党**はこれを受けとることを拒絶した』

②もちろん、『人民大学紅衛兵』が鄧小平同志や劉少奇同志にたいしてどのような非難をあびせようと、それは中国の内部問題であって、わが党の関知するところではない。だが、この文章のなかの、わが党に『修正主義』の烙印（らくいん）をおしている部分は、わが党にたいするまったくゆるしがたい攻撃であり、日本共産党としてけっして見すごすことのできないものである。

……

（二）

③『人民大学紅衛兵』がはりだした壁新聞の特徴は、ウソのなかにいくらか『現象』（?!）をまじえるという手法で書かれていることである。その結果、その内容は、日中両党会談と共同コミュニケをめぐる経過についてさえ、事実から遠くはなれたものとなっている。

④たとえば、この壁新聞は、『劉少奇、鄧小平がおもに出て会談し、一つの声明草案をつくった』と書いている。たしかにわが党代表団の昨年三月の中国訪問のさいに、日中両党代表団の共同コミュニケが採択されたことは事実であるが、この作成の当時は、劉少奇同志も鄧小平同志も北京には不在とのことで、共同コミュニケ作成の両党間の協議にはまったく参加しなかった。

⑤日中両党会談は三月上旬におこなわれた。このときの中国共産党代表団は、劉少奇同志を団長とし、鄧小平、彭真、康生、廖承

志、劉寧一、呉冷西、趙安博、張香山の各同志からなっていた。会談は友好的におこなわれたが、両党間の多くの意見の一致とともに、いくつかの重要な諸問題について意見の不一致があることがあきらかとなった。会談は三月八日に終了し、共同コミュニケ作成については、双方とも一言もふれなかった。

日本共産党代表団が、その後、朝鮮民主主義人民共和国を訪問し、帰国の途中北京に立ちよったさい、中国側から、共同コミュニケの作成と、北京における歓迎集会の開催という、あたらしい申し入れがおこなわれた。わが党代表団は、両党の友好関係の強化を願う立場から、この提案をうけいれ、帰国をのばすこととした。こうして予定にはなかった第二回目の日中両党会談がひらかれることになったが、当時、劉少奇同志はすでにパキスタン訪問に出発しており、鄧小平同志も地方に出発して不在とのことであった。

⑥共同コミュニケ草案の作成は、日本側は岡幹部会員、中国側は劉寧一同志を責任者とする小委員会があたることとなり、双方とも、両党会談の一致点で書くこと、不一致点にはふれないこと、できるだけ簡潔なものにすることという三つの基準を確認しあった。

数日にわたる小委員会での協議をへて、一致点にもとづく共同コミュニケ草案が完成し、三月二十七日周恩来同志を責任者とし、彭真、康生、劉寧一、廖承志各同志をふくむ中国共産党代表団との会談がひらかれ、共同コミュニケは正式に合意が成立した。……

両党代表団はこのコミュニケの成立（?!）をよろこびあい、日中両党間の戦闘的団結をさらに強化してゆくための決意をこもごものべあった。……

⑦以上の経過は、日中両党代表団の共同コミュニケ作成が、あたかも劉少奇、鄧小平両同志と日本共産党代表団の合作によるものであるかのようにえがきだしている『人民大学紅衛兵』の壁新聞が、まったく事実に反したウソであることを十分にしめしている。

⑧壁新聞はまた共同コミュニケの『草案』にたいして『毛主席が……みずからきわめて重要な修正をおこない』、『修正主義の日本共産党』が『拒絶した』結果、共同コミュニケの同意が成立しなかったように事態をえがきだしている。しかし、これもまた、いくらかの現象（?!）にくるんで真実とかけはなれたことを書いたものでしかない。

⑨たしかに毛沢東同志は、共同コミュニケについての変更の要求を提出したが、これは共同コミュニケの『草案』にたいしてではなく、正式の両党代表団の会談で合意が成立して、あとは発表をまつばかりだった共同コミニュケの正文（?!）にたいしておこなわれたものであった。たしかに共同コミュニケは発表されないでおわったが、これは日本共産党代表団に責任があるのではなく、正式の合意が成立した後になって、両党会談における不一致点をふたたびもちだし、一方的におしつけようとして、これに失敗す

る（?!）や、すでに最終的に合意が成立した共同コミュニケを一方的に（?!）破棄した側に全責任（?!）があるのである。

⑩わが党代表団は、北京の両党代表団の正式会談で共同コミュニケについての最終的な合意が成立し、発表の段どりまでとりきめた（?!）とき、当然、ここには中国共産党指導部の正式の意見が反映しているものと考え、あとでこの問題（?!）がふたたびむしかえされるとは夢にも思っていなかった。とくに、毛沢東同志との会見は、帰国のさいにあいたいという中国側の申しいれにより、朝鮮訪問前から予定されていたもので、日中両党代表団の会談の継続とか、正式の合意ずみ（?!）の共同コミュニケの再検討のための会談とかいうような性質をもつものではなかったのである。

ところが、代表団をきわめておどろかせた（?!）ことは、毛沢東同志が、会見の冒頭、両党の代表団の正式会談で最終的に確認され、すでに決定ずみ（?!）になっていた共同コミュニケについて、このままでは発表に『同意することができない』という意思表示をおこない、その内容の大幅な変更の要求を、提起したことである。

毛沢東同志が提起した変更要求は、すでにそれまでの両党会談のなかで、両党間に原則的な不一致があることがあきらかになった問題をむしかえしたうえ、さらにいままでまったく論議もされなかったあらたな問題点までつけくわえたものであった。

⑪わが党代表団が、この一方的な変更要求を拒否するとともに、わが党の見解を卒直にのべたことはいうまでもない（?!）。それぞれ自主、平等の党としての日中両党間の真の友好を発展させるため（?!）には、わが党代表団が、それ以外の態度をとることができなかったのは当然のことである。

これにたいして毛沢東同志は、それなら共同コミュニケをだす必要はない、中国側が共同コミュニケをだそうと提案したのは誤りだったとのべ、さらに『自分との会見はなかったことにしよう』として、会見は終わったのである。

⑫いったい、だれが共同コミュニケをほうむったかは、きわめてあきらかであろう。

（三）

⑬『人民大学紅衛兵』の壁新聞は、共同コミュニケに『一点もソ連修正主義の文字が出ていない』、『毛主席はこれにたいし鋭い批判を出した』などと書いて、あたかも日本共産党がソ連共産党指導部の現代修正主義にたいする闘争を回避しようとし、そのことが毛沢東同志の「鋭い批判」をあびたかのように、事態をえがきだそうとしている。これは、わが党の立場をも、日中両党会談の経過をもまったく乱暴にゆがめた、でたらめな中傷である。

⑭わが党が、日中両党会談のなかで、『ソ連修正主義』との闘争を回避しようとしたなどというこの非難が、なんの根拠もないつ

くり話であることは、ベトナム、中国、朝鮮三国訪問中に、わが党を代表して宮本書記長がおこなった一連の講演や演説をみただけでも、たちまち明白となる。たとえば、昨年三月二十六日、日中両党の共同コミュニケ作成の協議がつづけられているさなかにひらかれた北京での歓迎大集会において、宮本書記長は、ソ連共産党指導部の修正主義、日和見主義、分裂主義の路線にたいするわが党の態度を、つぎのようにきわめて明確に（?!）説明している。

『われわれ自身も、とくにフルシチョフを先頭としたソ連共産党指導部から公然とした攻撃と干渉がくわえられて、これに全面的な反撃（?!）を開始してから、多くの理論的、思想的闘争をおこなってきました。

現代修正主義のアメリカ帝国主義美化論（?!）はアメリカ帝国主義のベトナムにたいする兇暴な侵略戦争の過程のなかで、その根本的なあやまり（?!）が全世界人民のまえに暴露されてきました。世界人民は、アメリカ帝国主義に反対する闘争の戦列に、ますます多く決然と参加しつつあります。われわれがアメリカ帝国主義に反対する国際統一戦線の旗をたかくかかげ、また現代修正主義（?!）――いっさいの日和見主義（?!）にたいする闘争の見地を正しくそれにむすびつけてすすむならば、われわれは、アメリカ帝国主義をよりいっそうの孤立においやる（!!）ことができます。そしてまた、現代修正主義（?!）の孤立（?!）と破たんをつよめることができます。それは、すなわち、ベトナムにおけるアメリカ帝国主義の侵略をより効果的に（?!）打ち破り、ベトナム人民の勝利をより効果的にはやめる道でもあります。

日本共産党は今後とも確固としてこの任務を遂行するでしょう』

そして、わが党が、ここで宮本書記長が表明した見地をその後もひきつづき堅持し、アメリカ帝国主義のベトナム侵略に反対する国際統一戦線の強化のために奮闘するとともに、その任務と正しくむすびつけて（!!）ソ連共産党指導部の修正主義、日和見主義、分裂主義の誤りにたいする闘争を、もっとも原則的に（?!）おこなってきたことは、わが党が発表した一連の諸論文および第十回党大会の決定が疑問の余地なく（!!）しめしているところである。このことは、日中両党会談の経過をわい曲して、わが党が『ソ連修正主義』との闘争を回避したかのようにえがきだそうとする『人民大学紅衛兵』らの非難が、どんなにでたらめないいがかりであるかを、証明してあまりあるものである。

⑮共同コミュニケのなかにソ連共産党指導部への名ざしの非難が書かれなかったのは、それとはまったく別個の理由（?!）にもとづくものである。

⑯わが党代表団は、共同コミュニケ作成の協議のなかで、ソ連共産党指導部への名ざしの非難を書きこむことに賛成しない（!!）

態度を表明したが、それは、『人民大学紅衛兵』らが主張するように、わが党が『ソ連修正主義』との闘争を回避しようとしたからではけっしてなく、ソ連共産党指導部の評価（?!）の問題、とくに今日の情勢のもとで、現代修正主義の潮流とどうたたかうかの問題が、両党会談における重要な不一致点の一つであったからである。アメリカ帝国主義のベトナム侵略に反対する国際統一行動、統一戦線に、ベトナム人民支持を一応（?!）表明し、援助をおこなわざるをえなくなっているソ連共産党指導部をふくめる（?!）かどうか、ソ連共産党（?!）をアメリカ帝国主義と同列において反米反ソの統一戦線でたたかうべきかどうかは、日中両党の見解がもっともするどく対立した点の一つであった。もし、共同コミュニケに、現代修正主義にたいする闘争についての一般的原則的な規定にとどまらないで、ソ連共産党指導部についての名ざしの非難をふくめるとすれば、それはどうしても、今日の情勢のもとでのソ連共産党指導部の評価についての両党間の意見の相違にふれざるをえなくなる。しかし、それは、共同コミュニケ作成にあたって確認しあった、不一致点にはふれず一致点だけを書くという原則にもとることになる。

わが党代表がこのことを指摘すると、中国側代表も最終的にはこれに同意し、さきにのべたように、三月二十七日、周恩来同志をはじめとする中国側代表団との正式会談で共同コミュニケが正文として最終的に決定されたのである。

⑰ところが、この問題は、その後の毛沢東同志との会見のさいにふたたびむしかえされ、毛沢東同志は、共同コミュニケについての自分の変更要求を提示したが、その中心点の一つは、両党会談での合意に反して、現代修正主義との闘争に関する部分に、ソ連共産党指導部への名ざしの非難を書きくわえるとともに、さらに一歩をすすめて、事実上（?!）、反米反ソ統一戦線の立場を、積極的に共同コミュニケにもちこもうとしたものであった。これが『人民大学紅衛兵』のいう毛沢東同志の『鋭い批判』なるものの内容である。

こうした経過は、『人民大学紅衛兵』などの主張とはまったく逆に、『ソ連修正主義』の問題をめぐる両党会談での意見の不一致の中心点は、これとたたかうかどうかという単純な問題（?!）ではなく、アメリカ帝国主義のベトナム侵略の兇暴化（?!）に直面し、国際的な反帝闘争の圧力のもとで二面的態度（!!）をとらざるをえなくなったソ連共産党指導部にたいして、可能な（?!）反帝統一行動のための努力をおこないつつ（?!）、その誤りを批判する（?!）という革命的二面政策（?!）をもって対処するか、それともこれをアメリカ帝国主義と同列の敵とみる反米反ソ統一戦線という立場をとるかの対立であったことを、はっきりとしめしている。そして、いったん作成された共同コミュニケは、両党間にこの不一致点があることを、たがいに承認しつつ（?!）、一致点での共同行動を強化するという精神（?!）にもとづいてつくられていたのにたいし、最終段階での毛沢東同志の『鋭い批判』なるものは、

両党間に原則的な意見の相違のある問題について、中国側の意見を一方的に(?!)ふたたび(?!)わが党におしつけようとしたものであったのである。毛沢東同志のこうした『批判』と変更要求を、わが党代表団がうけいれなかったのは、両党会談の経過からみても、党大会および中央委員会の決定にもとづいて活動している日本共産党代表団としてあまりにも当然のことである。

⑱そして、『人民大学紅衛兵』が、このことをもって(?!)、日本共産党にたいして、『修正主義の党』だなどというレッテルを公然とはりつけていることは、まったく虚偽にもとづく一方的な独断であるだけでなく、わが党にたいする侮辱的な挑戦(?!)である。かれらが、わが党にたいして『修正主義』の党うんぬんという侮辱的な非難をあえておこなう唯一最大の根拠(?!)は、けっきょくのところ、わが党代表団が毛沢東同志の主張に無条件にしたがわなかったということだけである(!!)。もちろん、『人民大学紅衛兵』が、中国の内部で、毛沢東同志の言説に無条件に盲従するかどうか(!!)こそが『マルクス・レーニン主義か修正主義か』の試金石だといった命題を主張することは、かれらの勝手であって、わが党の関知しないところである。だが、かれらが、この主張(?!)を国際的におしひろげ、その基準(?!)を日本にもちこんでわが党への非難の根拠にしようとしても、それはけっして通用するものではない。われわれは、マルクス・レーニン主義をただ一つの行動の指針としている(?!)共産主義者として、このような独断的な非難を、断固として粉砕するものである。

⑲以上にみたように、日中両党会談の経過のまったくのわい曲にもとづいて(?!)、わが党に『修正主義の日本共産党』などの烙印をおしている『人民大学紅衛兵』の壁新聞は、かれらの政治的、理論的立場の反マルクス・レーニン主義的独断性と非科学性を具体的に暴露するとともに、人民の先頭にたって不屈の闘争をおこなっている他国の共産党にたいし、プロレタリア国際主義のいっさいの信義を無視して、乱暴きわまる一方的攻撃をくわえてはばからない、国際共産主義運動におけるかく乱者としての立場を、明確にしめしたものである。

わが党は、自主・平等・相互の内部問題への不干渉という国際共産主義運動、国際民主運動(?!)の団結の基準をまっこうからふみにじった『人民大学紅衛兵』のわが党にたいする不当な攻撃をきびしく糾弾するとともに、今後これらいっさいの不当な批判や攻撃にたいしては、断固これに反論する当然の権利を行使することをかさねて表明するものである」(傍点、ゴシック体および(?!)、(!!)——山本)。

ごらんのように、『紅衛兵の不当な非難に答える』というものものしい表題で「赤旗」第一面の全段をほとんど埋

めて大々的に毛沢東主席と『紅衛兵』とにたいする非難・攻撃を展開しているこの公式論説が目にかどを立てて――「すはこそ、絶好の材料だ」、として――かみついているのは、「人民大学紅衛兵」の壁新聞記事のほんの一部分、たかだかきわめて短い五つの文章、全部で六行にもみたない簡単なものである。とはいえ、この簡潔な文章は、きわめて的確に真実をとらえているものと考えられるのであって、それが真実をとらえていればこそ、その深奥の致命的弱点を突かれた俗物は、いよいよ大声でがなりたててその真実を射た言葉をもみけしてしまわずにはいられないのである。しかし、まさに「文は人なり」である。右の公式論説は、かえって、「日共指導層」の独自的な「品性」を、その全面にわたってさらけだすだけのものとなっているのは、理の当然というべきであろう。どれだけ、それが全面的に自己暴露するものとなっているかを、つぎに吟味してみよう。

六

まず、問題の「壁新聞」の文章について、「赤旗」論説がどのようにとりあげて攻撃しているか、ということからみていこう。

一　「壁新聞」の最後の文章は、「その結果、修正主義の日本共産党はこれを受けとることを拒絶した」となっている。「拒絶した」のは事実であって論駁しようはないが、「赤旗」が問題にしたのは、「修正主義の日本共産党」という文字である。「赤旗」は、これについて、第一に、「毛沢東同志のこうした「批判」と変更要求を、わが党代表団がうけいれなかった」という「このことをもって」、「日本共産党にたいして『修正主義の党』だなどというレッテルを公然とはりつけている」と非難している（⑰⑱）。これはまったく見当ちがいのいいがかりである。「壁新聞」は「修正主義の日

本共産党」は「これを受けとることを拒絶した」と明記している。この文章をさかさまにして、「日本共産党はこれを受けとることを拒絶したので、修正主義の党だ」という意味のものだとするのは、文字どおりイカサマである。右の文章を論理的に正しく、冷静に読めば、むしろ反対に、「日本共産党はもともと修正主義の党だから、これを拒絶した」という意味をもつものとしか考えられない。ところが、「赤旗」は右のイカサマをおしひろげて、「『修正主義』の党うんぬんという侮辱的な非難をあえておこなう唯一最大の根拠は、けっきょくのところ、わが党代表団が毛沢東同志の主張に無条件にしたがわなかったということだけである」と言いたてている(⑱)。錯乱した誤読をもって相手を非難するとは、なんとなさけない「共産主義者」ではあるまいか。

第二に、「『修正主義』の党うんぬんという侮辱的な非難」という、かれら自身の言葉の意味を、かれら自身、全然わきまえていないようである。「修正主義の党」という批判をすること、—そのこと自体が「侮辱的な非難」だというのか?! それならば、自分たちは、フルシチョフ教祖にたいして、ソ連共産党指導部にたいして、なんと言っているか?! 「現代修正主義の巨頭」、「ソ連共産党指導部の修正主義、日和見主義、分裂主義の路線」(⑭)と、ごていねいにやっつけているではないか!! 「赤旗」は、まさに「頭にきた俗物」よろしく、「修正主義の党」という批判は、「自主・平等・相互の内部問題への不干渉という国際共産主義運動、国際民主運動の団結の基準をまっこうからふみにじった」などとわめきたてている(⑲)。それならば、自分たち自身、「現代修正主義の巨頭」や「ソ連共産党指導部の修正主義、日和見主義、分裂主義」という二重、三重のうたい文句を、くりかえし並べたてているではないか?! いったい、「日共指導層」は、何十回、「基準をまっこうからふみにじっている」ことか!!

第三に、「修正主義の日本共産党」という文字は、はたして、デマだろうか、それとも真実を正確にとらえたもの

であろうか？　問題を出すだけで、ただちにその答えはかえってくる、――それは完全に真実をとらえた文字だ、と。理由は簡単明瞭である。本稿でさきに引用した一九五六年三月二十四日付「アカハタ」第一面トップに飾られた「日本共産党中央委員会」の公式主張をみるがいい。また、これをいわば「伏線」としてうちだされた「**日本共産党第七回中央委員会総会の決議**」を読むがいい。そして、これら二つを必要な「前おき」としてまんまと第八回党大会で「満場一致」採択された「日本共産党綱領」を一読するがいい。この「綱領」は、さきに詳細に吟味したように、「現代修正主義の巨頭」＝フルシチョフが第二〇回大会ではじめておおっぴらに打ちだした修正主義理論と修正主義路線を「マルクス・レーニン主義の創造的発展」として心底から渇仰し、これに完全に盲従してつくりあげた一〇〇％フルシチョフ式超修正主義「綱領」である。この天下に悪名高い教祖盲従「綱領」を「基本」として修正主義的・日和見主義的「闘争」をやらかしている「党」が、フルシチョフ教祖にむかって「修正主義の党」と非難したとて、誰か真面目に耳をかす者があろうか！　「日共指導層」が「七中総決議」と「日共綱領」をその最中心的「基本」としているかぎり、「日本共産党」はりっぱに「修正主義の党」であり、これこそがその本質をもっとも的確に表現する文字である。それゆえ、「壁新聞」の第五の文章は、「虚偽にもとづく一方的な独断」や「不当な批判や攻撃」などではなく、また、「反マルクス・レーニン主義的独断性と非科学性を具体的に暴露する」ものなどではさらさらなく、客観的事実を正しくとらえたもの、真実を簡潔に表現したものにすぎない。だが真実をあばきだす言葉ほど、当の俗物＝修正主義者にはてきめんにこたえるのだ。自分では教祖・総本山に向って「現代修正主義・日和見主義・分裂主義」と悪態のかぎりをついていながら、さて自分についていわれると、やれ「侮辱的な挑戦」とか、「反マルクス・レーニン主義的独断性」とか、「自主・平等、相互の内部問題への不干渉という…団結の基準をまっこうからふみにじっている」とか、わめきちらす。

このおどろくべき身勝手な難癖づけ！

二　つぎに、「壁新聞」の第二の文章―「劉少奇、鄧小平がおもに出て会談し、一つの声明草案をつくった。」――についての言いがかりをみよう。「赤旗」は、これを反駁して、「共同コミュニケの作成の当時は、劉少奇同志も鄧小平同志も北京には不在とのことで、共同コミュニケ作成の両党間の協議にはまったく参加しなかった」（④）のだから、それは誤りだ、と主張している。ところが、これにすぐつづく⑤では、「日中両党会談」について「中国共産党代表団は、劉少奇同志を団長とし、鄧小平、彭真、康生、廖承志、劉寧一、呉冷西、趙安博、張香山の各同志からなっていた」と記し、「両党間の多くの意見の一致とともに、いくつかの重要な諸問題について意見の不一致があることがあきらかとなった。」と述べ、ここでの「多くの意見の一致といくつかの重要な諸問題についての意見の不一致」はそのまま「コミュニケ草案作成」にもちこまれ、「双方とも、両党会談の一致点で書くこと、不一致点にはふれないこと、できるだけ簡潔なものにすることという三つの基準」が「確認」されて、この「基準」にしたがって「草案」の作成がおこなわれた、と明記されている（⑥）。「会談」を「主宰」した中共代表団の「立役者」が劉少奇と鄧小平であったとすれば、「声明草案」の「主旨」がこの両名の「考え方」によって貫ぬかれているのは、当然すぎるぐらい、当然のことである。これを、「草案作成の当時」に「不在」だという理由で「否定」するとは、なんという陰険な間抜けであろうか！　劉少奇は「毛沢東の後継者」と称された党副主席、おしもおされもせぬ党内実権派の筆頭、これにつづく鄧小平は人も知る党内実力者第二号、中共書記長であること、劉少奇が「中国のフルシチョフ」として修正主義路線をおしすすめており、鄧小平はその片腕として奮闘しつつあり、北京市長・北京市党委第一書記、中共中央委員彭真は、いわば、劉少奇のもっとも有力な「子分」、党内実力者第三号として北京市委をがっちり「主宰」していたことは、今日誰ひとり知らぬ者はない、周知の事実である。たとえ

劉少奇、鄧小平がそこに居あわせなくても、「会談」は、劉・鄧の親「フルシチョフ路線」を「基軸」としておこなわれ、「声明草案」は「会談内容」に則して、しかも「実力者」彭真の直接の参加のもとで、作成されているのである。「壁新聞」の「劉、鄧がおもに出て会談し、一つの声明草案をつくった」という指摘が完全に事実に合致していること、「赤旗」論説の内容が、自分自身の述べたことすら全体的に理解できないほど混乱した性急な難癖づけであることは、寸分の疑いをいれないところである。

三　つぎに問題は、「声明草案」の中味である。中国側は「中国のフルシチョフ」劉少奇とその「親密な戦友」、鄧小平と彭真の「路線」で、日共側は御存じ「フルシチョフ盲従超修正主義」の「路線」で、ともに「会談」し、その「会談」の「趣旨」にしたがって「草案」をつくれば、しかも、両者の「一致点」のみについてとりあげ「不一致点」にはふれないという「基準」で作成すれば、その中味がどの程度のものとなるかは、どんな人にもおよそ察しがつくというものである。フルシチョフとソ連共産党指導部をともに「教祖・総本山」と仰ぎ師事し盲従する劉少奇と宮本顕治の両「巨頭」である。「壁新聞」がその「草案」をもって「調子はきわめて低いもので一点もソ連修正主義の文字が出ていない」と指摘しているのは、当然すぎるほど当然のことである。いや、厳密にいうならば、「調子が低いどころではなく、ソ連修正主義追随の俗物的修正主義の精神でことごとく貫ぬかれている」と言うべきであろう。それゆえ、いやしくもマルクス・レーニン主義の立場を守るかぎり、このような「草案」にたいして「鋭い批判」を出し「重要な、根本的な修正」を断固主張するのは、当然の義務でなければならない。そこで、つぎに「重要な修正」の問題についてみてみることにしよう。

七

四　「根本的な修正」が必要か否かは、それがマルクス・レーニン主義の革命的基本的原則をつらぬいているかそれともそれから逸脱しているかによってきまる。ここがもっとも肝腎なところである。それは、「手続き」に合っているかどうかなどで決められるべき事柄ではない。ところが、「赤旗」は、これを「手続き」の問題にすりかえ、「さきにきめた基準に反する。原則的な不一致点についてはふれないという申し合せをしたのだ。だから、修正を主張するのはこの基準＝申し合せに反し、一方的おしつけだ」と主張する。そもそも「原則的な根本問題」で「不一致」があって、その「原則的な不一致点」についてふれないような、つまり「原則的な不一致点」の存在を暗黙のうちに認めているような、そういうコミュニケなど、いったい、なんの役に立つというのか?!　それをしも発表しようと言いはるのは、「共同声明」を出したというお体裁を、つまり中共と「腕を組んで」たたかっているという形を、天下にひけらかしたい俗物どもだけである。「赤旗」は、⑪で、「日中両党間の真の友好を発展させるために、それ以外の態度をとることができなかった」などと、見当ちがいのいいわけをしている。「真の友好を発展させるためにこそ」マルクス・レーニン主義の革命的基本的原則を明確にしてこれを共通の基盤としなければならないのだ。「マルクス・レーニン主義の革命的基本的原則をつらぬきとおすためには、それ以外の態度をとることができなかった」という、当然の説明がその頭に全く浮ばないとは、なんと、革命的基本的原則を忘れはてた、腐った俗物的修正主義者どもであろうか?!

つぎに、「手続き」にかんして、「赤旗」は、⑨で、「正式の両党代表団の会談で合意が成立して、あとは発表をまつばかりだった共同コミュニケの正文にたいして、毛沢東同志は変更の要求を提出した」と述べているが、趙安博氏の「談話」――

後出――にもあるように、「草案は宮本代表団が起草し、中共側は毛主席のところで最終的に決めることをあらかじめ言っておいた」のであり、「中国のフルシチョフ」党副主席らが「合意」したものであっても、党主席はそれがマルクス・レーニン主義の革命的基本的原則にそっているかどうかを吟味するのは、当然の義務であり権利である。それ故、「手続き」としても、毛主席の「修正要求」はりっぱに根拠がある。しかも、内容的にみて革命的基本的原則をつらぬかず、それをぼやかしているばかりでなく、反帝反修を徹底的にたたかいぬくことを阻害せずにはいないような修正主義的・日和見主義的草案にたいしては、平党員（ヒラ）といえども、断固たる修正要求を提起しなければならないはずである。

五　「赤旗」は、⑭で、「わが党が『ソ連修正主義』との闘争を回避しているというのは、でたらめないいがかりである」として、その「証拠」に「宮本書記長の演説」と「わが党が発表した一連の諸論文および第十回党大会の決定」なるものをひけらかしている。これについては、第一に、「フルシチョフ完全盲従」の「七中総決議」と「日共綱領」を「基本」としているような党が「ソ連修正主義」との「闘争」など薬にしたくともできるものでないこと、これまで詳細にみてきたように、もっぱら保身のための「弁明」が精一杯であるということを、想起しておこう。宮本書記長の演説にしても、こういう「ためにする」おしゃべりは、すでにいやというほどその実例をみてきたものである。超修正主義ともいうべき「フルシチョフ新綱領」をほめちぎって榊氏が「この新綱領にたいしてケチをつけようとする高踏的な修正主義者がいる」などという見えすいたはったりを並べたのは、そのほんの一例にすぎない。フルシチョフ教祖に盲従しこれに輪をかけた俗物的修正主義者であればあるほど、それと名ざしすることを極力さけて「修正主義、日和見主義、分裂主義」を非難・攻撃するのだ。⑭での宮本氏の演説の後半の「現代修正主義」をそのまま「ソ連修正主義」とお

きかえてみるがいい。「アメリカ帝国主義美化論」をふりまわす「ソ連修正主義」であるというのに、なぜ、名ざしでこれを批判・攻撃できないか?! 現代修正主義の元兇をば、それと名ざしして徹底的に暴露してたたかわないで、どこに「ソ連修正主義」との革命的闘争があるか?!

六　最後に決定的な意味をもってくるのは、「ベトナム援助統一戦線」に「ソ連修正主義党」を容れることができるかどうかの問題である。「日共指導層」は、これを容れることができるという考え方にしがみつくことによって、毛主席の修正要求をはねつけたのであるが、このことによってまた、第一に、「日共指導層」が「ソ連修正主義」と徹底的に闘争するどころか、あいもかわらず「フルシチョフ式綱領」をお守りとして教祖・総本山の「再興」をけんめいに策している忠実な弟子であることが、そして第二には、このような俗物的修正主義の塊りともいうべき「日共指導層」が考えつくことのできる「統一戦線」なるものは、せいぜいお粗末な「仲良しクラブ」以上に出ないということが、すっかり明るみに出されてしまったものである。

まず、第一の点について、「赤旗」は、⑯で、「ソ連共産党指導部の評価の問題、とくに今日の情勢のもとで、現代修正主義の潮流とどうたたかうかの問題」が「両党会談における重要な不一致点の一つであった」と述べている。いったい、「現代修正主義の巨頭、その総本山」を「どう評価するか」が問題だというのか？　いったい、これと「どうたたかうか」が問題だって?!　こんなことを問題とするとは、なんとあきれかえったフルシチョフ総本山への「べったり尻つき」どもであろうか?!　「赤旗」自身、⑬で、「ソ連共産党指導部の現代修正主義」と明記しているではないか。現代修正主義の総本山に対してとるべき態度はただひとつ——それの修正主義的な考えを徹底的に暴露し最後まで容赦なく闘争してマルクス・レーニン主義の陣営から放逐し、勤労人民を真に革命的基本的原則をもって武装させ、革命にむけて

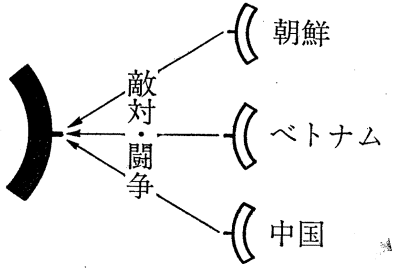
指導・訓練すること――これだけである。「全問題は、カウツキー一派がやっているように、（膿腫との）『統一』のために膿腫を体内におしもどすよう試みるべきか、それとも、労働運動の身体を完全な健康体にするのをたすけるために、そのためにひきおこされる一時の激痛をもこらえて、きわめてすみやかに、念入りにこの膿腫をとりのぞくべきかどうかにあるのだ」というレーニンの真摯・適切な指摘は、この場合にぴったり妥当する。（全集第四版、第二十二巻、九九ページ参照）。現代修正主義こそ、現段階における最も悪質な日和見主義であり、「膿腫」であるのだ。

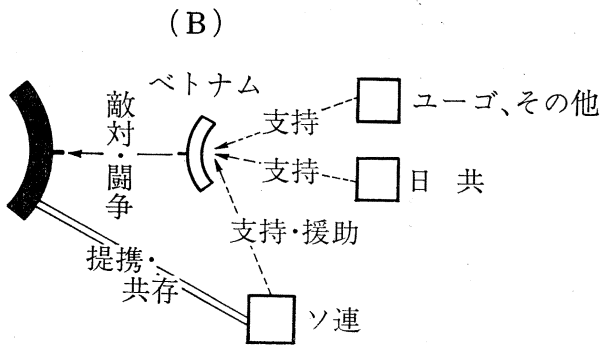
第二に、「ベトナム援助統一戦線」に「現代修正主義のソ連共産党指導部」をふくめる問題について。なんとしてでも教祖・総本山を一枚加えたいと切望する「日共指導層」は、つぎのような「問題の出し方」をする、――「ベトナム人民支持を一応（!!）表明し、援助をおこなわざるをえなくなっているソ連共産党指導部をもふくめるかどうか、ソ連共産党をアメリカ帝国主義と同列において反米反ソの統一戦線でたたかうべきかどうか」（⑯）、「アメリカ帝国主義のベトナム侵略の兇暴化に直面し、国際的な反帝闘争の圧力のもとで二面的（!!）態度をとらざるをえなくなったソ連共産党指導部にたいし、可能な（?!）反帝統一行動のための努力をおこないつつ、その誤りを批判するという革命的（?!）二面政策（?!）をもって対処するか、それともこれをアメリカ帝国主義と同列の敵とみる反米反ソ統一戦線という立場をとるか」と。マルクス・レーニン主義の革命的基本的原則の見地をすっかり放棄してフルシチョフ盲従の「綱領」を守り本尊とする「日共指導層」にとっては、レーニンの数々の教示など、まさに馬の耳に念仏である。いったい、「ベトナム人民支持を一応表明しないような、ほんの申し訳程度の援助もおこなわないような」そういう似而非マルクス主義者＝修正主義者があるだろうか?! 言葉つきも行動も一見マルクス主義者の体裁をとっているからこそ、修正主義者なのだ。まさに「二面的態度」をとるところにこそ、最も悪質な修正主義者＝裏切り分子の本領があるのだ。だから、現代修正主義者どもが、「一応ベトナ

ム支持を表明したり、ほんの申し訳ていどの援助をする」のを高く評価して、その面で「統一行動」をしながら「その誤りを批判する」などというやり方を主張する者は、そもそも修正主義者がどんなに悪質な敵であるかということを全然わきまえず、したがってマルクス・レーニン主義の革命的基本的原則をかれらに売り渡す手合でしかないということを、自分自身でさらけだしているものである。こうした修正主義者温存・支持のやり方を「革命的二面政策」と呼んでひけらかすとは、なんと度しがたい俗物的修正主義者であることか！

だが、もっとも肝腎なことは、統一戦線という言葉の内容を正確にとらえているかどうかということにある。「日共指導層」は、もっぱらベトナムへの「支持」と「援助」だけを基本として「統一行動」とか「統一戦線」とかいう文字を並べたてている。いったい、ベトナムへの「支持」を表明し、若干の「援助」をおこなえば、それで、「統一戦線」に加わったことになるであろうか？　なるほど、それはベトナムへの「支持」と「援助」という、同じ行動には参加している。しかし、それが真の「支持と援助」であるか、それとも、修正主義者がマルクス主義者としてのお体裁を保つために必要止むをえない形だけの「支持と援助」であるかは、ただその一面をみただけではけっしてわからない。「日共指導層」は、一応「支持と援助」に加われば、「統一行動・統一戦線」に加わりうるものと考え、そのように主張している。これでは、たんに「ベトナム援助仲良しクラブ」にすぎない。なぜか？　ベトナムが現在必死に戦っている当の敵はアメリカ帝国主義である。われわれが「戦線を組む」ということは、ベトナムと肩を並べてアメリカ帝国主義にたいして戦線を組むということなのだ。だから真にベトナムを「支持し援助する」ためには、ともに手をたずさえてたたかうためには、ベトナムがたたかっていると同じようにアメリカ帝国主義にたいして決定的に敵対し、最後まで仮借なくこれとたたかうものでなければならない。このばあい、ベトナムと他の統一戦線参加国

とのちがいは、直接武器をもってアメリカ帝国主義と戦闘をかわすかいなかという点だけである。この真の「ベトナム援助統一戦線」のあり方を図示すれば、上のとおりである（Ⓐ図）。ところが、「日共指導層」の頭の中にある「ベトナム援助統一戦線」は、Ⓑ図のように、ベトナム以外の国は、アメリカ帝国主義と決定的に敵対してこれにたいし最後まで仮借なく戦うどころか、一面では「仲良く」ベトナムに「支持と援助」をおくりながら、また他面、アメリカ帝国主義とも「仲良く」やっていけれるといった代物（シロモノ）である。これでは、いったい、どこに戦線があるというのか?! 戦闘はすべてベトナムの肩に負わせ、彼ら自身は、一面では「ベトナムへの一応の支持と申し訳ていどの援助」をすることで「共産党」としての体裁をとりつくろいながら、他面では当の「敵」アメリ





カ帝国主義と物資交換・文化交流・軍事協定等々で緊密な相互依存関係――まさに共存!!――を保つことによって、「ソ連共産主義社会建設最優先主義」の道をなんとしてでもつらぬこうとしている、この骨の髄からの俗物的修正主義者どものフルシチョフ党、そしてこのような党をぜひ一枚加えてエセ「統一戦線」を結成しておのれの国際的・国内的地位の強化をはかろうとする同じく骨の髄からの俗物的修正主義者どものフルシチョフ盲従「日共」党!! こうしたフルシチョフ盲従党の唱える「民族民主統一戦線」などというかけ声がどんなにいかがわしいものであるかということ、したがって永久にただのかけ声に、つまり修正主義者にとって必要不可欠の空宣伝に、終らざるをえないものでかということは、右の(B)式発想法に照らしてみるとき、まさに「掌を指すがごとく」明白となるのである。そしてあるまた、なによりも、真の「ベトナム援助統一戦線」は、(B)図におけるソ連共産党指導部のような修正主義党を断固切り捨て、むしろこれと徹底的に敵対しこれと仮借なく闘争することによって(A)図のような形につくりあげられてはじめて実際に成り立つものだということも、疑う余地なく明らかとなってくる。つまり、真の「ベトナム支援統一戦線」は、当然に「反米反ソ統一戦線」[2]でなければならないのである。

(2) この「反米反ソ」は、これを正確に表現すれば「反アメ帝反ソ連修正主義」であるということは、もちろんである。だが「日共指導層」が右の「赤旗」の中で「それともアメリカ帝国主義と同列の敵とみる反米反ソ統一戦線か」というはったり文句を並べているのは、この「反ソ」をもって、「反ソ連人民」という響きをことさらふくませてのことであると思われる。というのは、もし文字どおり「反アメ帝反ソ修」と明記すると、「ソ修」を「統一戦線」にふくめることが無理だということが誰の目にもあきらかとなる恐れもでてくるからである。

八

以上のようにみてくれば、『人民大学紅衛兵』の「壁新聞」の「日共指導層」にかんする部分の全文が完全に真実に合致していること、むしろそれが「日共指導層」のフルシチョフ盲従＝俗物的修正主義の本質を摘発することのあまりに控え目なものであることが、疑う余地なくあきらかとなる。もし、毛主席がマルクス・レーニン主義の革命的基本的原則の立場を堅持して「鋭い批判を出し、重要な修正をおこなう」ことをしなかったとすれば、最悪の「敵」＝現代修正主義にたいする徹底的批判はおろか、これを容認するような親(ブロ)修正主義的共同声明が、しかも、さきに(B)図でみたように、アメリカ帝国主義と完全に密着＝吻合しているソ連共産党指導部をも反米統一戦線によろこんで迎えいれるという全く恥知らずの共同声明が発表され、これによって日中両国人民は、俗物的修正主義をマルクス・レーニン主義と見誤まる愚をくりかえす羽目におとしいれられ、マルクス・レーニン主義の革命的基本的原則を守る立場を堅持することは全く困難になったことであろう。そして、おそらくは、そういう結果を、「中国のフルシチョフ」らも「フルシチョフ盲従のべったり尻つき」どもも、内心ひそかに期待していたことと思われる。革命的基本的原則の立場がぼやければぼやけるほど、俗物的修正主義の「頭領」どもの「地位」はますます安泰となるのだ。

ソ連共産党第二〇回大会での『フルシチョフ報告』に随喜の涙をながし熱狂的に歓迎した「日共指導層」は、ただちに「七中総決議」を大々的に発表して、フルシチョフ主義・フルシチョフ路線への完全追随を天下に周知させ、一九六一年七月、フルシチョフ主義・フルシチョフ路線への完全盲従を最重要骨子とする「日本共産党綱領」を第八回大会で採択決定し、以後一貫してこの基本線を堅持してきている。「修正主義の日本共産党」という「壁新聞」の

規定は、完全に事実に合致したものでしかない。だが、その実体を正確に表現しているこの簡単な指摘が、実に、保身に懸命の俗物的煽動政治屋どもにとってはとうてい黙過できるものではなく、そのために、かれらは、その知恵のありったけをしぼっておよそ思いつくかぎりのいいがかり、中傷を並べたててこれに「反撃」を加えることになるのである。その「やっつけ」の出来栄え、つまり「成果」をつぎにまとめておこう。

イ　「アメリカ帝国主義を敵とする統一戦線には、修正主義党もふくめるべきである」という主張、つまり、「修正主義者でも、ベトナム支持を一応表明しさえすれば、また、ほんの申し訳ていどの援助をしていさえすれば、たとえ、アメリカ帝国主義と親交を結んでいても、アメリカ帝国主義にたいする反帝統一戦線にりっぱに加わることができる」という主張。これほど、フルシチョフ教祖と総本山を心からうれしがらせる「統一」文句が、またとあるだろうか！

ロ　「修正主義者を批判するには、特定の、具体的な修正主義者とその主張について批判してはならぬ。それと名ざしせずに、ごく一般的に、たとえば――榊氏の迷言のように――『ケチで高踏的な修正主義者ども』とか、『現代修正主義者、日和見主義者、分裂主義者』とかいうように、誰を指しているかしかとわからないような形でやっつけるべきである。こういう批判こそが、修正主義にたいする真のたたかいかたなのだ」。その正体をなんとかしてごまかそうと苦心している骨の髄からの修正主義者・修正主義党にとって、なんと、願ったり叶ったりの手を考えだしてくれる、えがたい徒党であろうか！

ハ　「『七中総決議』と『日共綱領』という確固不動の修正主義路線を打ちたてた党大会および中央委員会の決定にもとづいて活動している日本共産党代表団として、毛沢東同志のマルクス・レーニン主義の基本原則にそった『批

判』や『変更要求』をうけいれなかったのは、あまりにも当然である」という、世にも奇妙にしてもっともな、「逆ねじ」的主張。

二　「七中総決議」と「日共綱領」で完璧に打ちたてたフルシチョフ盲従路線を看板とする「日共指導層」の真意に則して「修正主義の党」という適切な規定を用いると、これにたいしては、「まったく虚偽にもとづく一方的な独断であるだけでなく、わが党にたいする侮辱的な挑戦である」というスゴミをきかした非難をなげつける！　ところが、この「虚偽にもとづく一方的な独断」という自身の言葉をさらにひんまげて、なんと、「毛沢東同志の言説に無条件にしたがわなかったので、そのために、わが党にたいして『修正主義の党』うんぬんという侮辱的な非難をあえておこなったのだ」という、まったく根も葉もないいいがかりをでっちあげている。ところが、このチンピラまがいのいいがかりをわめきちらすことによって、この狡智にたけた俗物的修正主義者どもは、これにより同時に二つの、同じく根も葉もない虚偽の印象をまんまとまきちらす。それは、ひとつは、「中国の内部では、毛沢東思想の言説に無条件に盲従するかどうかこそが、『マルクス・レーニン主義か修正主義か』の試金石だといった命題が通用している」といった、全くでたらめの中傷であり、もうひとつは、「これにたいして、日共は、そういう教条主義的おしつけ、独断的基準はだんことして拒否する、世にもりっぱなマルクス・レーニン主義党だ」といった、同じく完全に虚偽のでっちあげである。「七中総決議」と「日共綱領」で確固不動のフルシチョフ式修正主義路線を打ちたて固守してきた正真正銘の「修正主義の日本共産党」であればこそ、マルクス・レーニン主義の革命的基本的原則の立場から出された当然の「批判」と「修正」を「拒絶」したのである。この疑う余地のない事実を簡潔に述べた「人民大学紅衛兵」の「壁新聞」のたった一つの文章――「修正主義の日本共産党はこれを受けとることを拒絶した」――に理不尽ない

いがかりをつけて、この文章からたちまち、右のような二つの真っ赤なウソ、悪質きわまるデマをでっちあげ宣伝してまわるとは、またなんと、見下げはてた「マルクス・レーニン主義党」であろうか!!

ところで、右の日中両党会談の経緯については、中国共産党側でもひとつの貴重な材料を提供しているのであって、それは、さきにふれた、中国共産党代表団の一員、趙安博氏の「談話」である。われわれは、つぎに、この「談話」を引用してかかげ、「赤旗」論説とこの「談話」とをつきあわせることによって、若干の重要な教訓をひきだすべくこころみることにしよう。

（一九六九・九・一三）